

月例研究会（2007年5月23日）

『日本労働運動資料集成』の  
編纂を終えて

早川 征一郎

法政大学大原社会問題研究所編『日本労働運動資料集成』（以下、『資料集成』と呼ぶ）全14巻（旬報社）は、2005年12月に第1回配本を行って以来、2007年6月5日付で、第5回（最終回）配本として資料集本体第13巻および別巻を刊行し、ここに完結した。この『資料集成』のための編纂委員会＝戦後労働運動研究会が発足したのが2003年6月11日であったから、足かけ4年の年月を費やした仕事であった。この編纂のための研究会はほぼ60回に及んだ。また、毎回、「研究会ニュース」を発行し、それに基づく合意確認を行いつつ進めた。その「ニュース」も約60号近い。

編纂委員会は近く、この『資料集成』の編纂過程を振り返り、編纂委員会自身による総括的検討を行うことをもって締めくくり、解散する予定である。その総括的検討のための基調報告的意味を持つのが、編纂責任者である早川の今回の研究会報告である。

研究会報告は、(1)この『資料集成』の編纂がどんな契機、意図から始まったか、(2)編纂委員会を立ち上げたあと、いよいよ編纂作業が始まるにつれ、次々にどういう問題にぶつかり、それらをどう解決していったか、(3)そうした編纂過程を追体験することによって、この『資料集成』の成り立ちを明らかにすることを主眼に行われた。そうした意図のもと、研究会報告

の柱は以下のとおりであった。その一部については、ごく簡単なコメントを付すことにしよう。

はじめに 本研究会報告の主眼－上記（1）～（3）

1 『日本労働運動資料集成』編纂の契機と意図

・「刊行にあたって」を参照されたい。

2 編纂委員会の立ち上げ

・大原社研の専任・兼任・客員・嘱託研究員をもって立ち上げた。

3 先行資料集の検討と聞き取り（略）

4 『資料集成』の質と量＝どのくらいの資料集を編纂するか

・戦後60年の労働運動を俯瞰する本格的な資料集編纂を目指すこととした。

5 テーマ別編纂か、時期区分別編纂か

・結局、時期区分別編纂とし、別巻索引にテーマ別索引を設け、テーマ別編纂の趣旨を活かすこととした。

・各巻のなかでは、各年ごとの見出し項目設定と資料選択を行うことを原則とした。

6 各資料の「出典」明記の確認＝本『資料集成』の大きな特色

・出典とともに、所蔵状況を明らかにし、利用者が元の資料にさかのぼれるように工夫した。

7 各巻・各年の見出し項目の選択作業

8 見出し項目ごとの資料選択作業

・7、8は資料集本体の編纂の核心部分であり、研究会のほとんどがこれに費やされた。

9 解説について

・各巻にその時代状況が分かるような解説を付けた。各年については、収録資料との関係が分かるように解説する工夫を行っ

た。

行の意義（略）

10 第1回配本用の編纂を終えて

・第1回配本（2005年12月）を終えた時点で、上記の4～9に伴う問題点を解決し、以後、第2回配本以降はそこで確立したルールないし申し合わせに則り、さらに改善を重ねていった。

11 別巻の構成内容について

・別巻を総目次、主要労働組合名簿（結成順、50音順）、主要労働組合組織変遷図、基本労働統計、テーマ別索引、見出し項目の50音索引より構成した。とくにテーマ別索引は、これまでの労働運動資料集には見られない新機軸である。

12 別巻の内容それぞれの意義と固有の困難性について（略）

むすび 『日本労働運動資料集成』全14巻刊

以上が、研究会報告の柱であった。本来なら、そうした柱に沿って、もっと詳しい報告内容を記すべきであろう。だが、ここでは報告の柱とその一部についてのコメントに留める。というのは、間もなく、本誌次号の9・10月合併号は、『日本労働運動資料集成』完結記念特集号として、その早川報告を基調報告として掲載し、その基調報告に沿った編纂委員会の総括的検討内容の掲載を予定しているからである。

ともあれ、編纂責任者として、最後に敢えて希望を付け加えれば、読者の皆さんが、この『日本労働運動資料集成』の実物をぜひ手にとって、ご覧いただければもっと幸いである。

（はやかわ・せいいちろう 法政大学大原社会問題研究所教授）

